茨木市域における縄文時代の様相

- 安威古墳群出土縄文土器の紹介をかねて -

木村 健明

１．はじめに

平成 26 年（2014 年）７月に安威三丁目地内（註１）において、ガス管埋設工事に伴う立会調査を実施した。その際、壁面で遺構を確認し、縄文土器が出土した。

茨木市を含む北摂地域では、縄文土器の出土自体が稀である。それは、縄文時代の遺跡が主に開発の少ない山間部に位置しているためと考えられる。山間部に位置する大字泉原（いずはら）・大字佐保の両地域では、免山篤氏（めざんあつし）が圃場整備工事で出土した遺物を採集されている（免山 1999、新海・森先 2003、茨木市 2014　註２）。

近年では、国際文化公園都市（現・彩都）土地区画整理事業や、新名神高速道路建設といった大規模な開発工事に伴って、粟生間谷遺跡・徳大寺遺跡・千提寺南遺跡の発掘調査が行われ、縄文時代の遺構・遺物が確認されている。

茨木市域における縄文時代資料は、これらの調査で増加したとはいえ、未だ限られている。今回報告する安威古墳群出土遺物は、立会調査という制約のため、十分な情報を得られていないが、縄文土器の分布の空白を埋める資料であり、貴重である。本稿では資料紹介を行うとともに、茨木市域における縄文時代遺跡の様相を整理し、今後の調査研究に向けた基礎的整理を行うことにしたい。

２．調査の概要（図１・２）

調査地は、安威川右岸の丘陵上（標高およそ 40 m地点）に位置し、丘陵が最も安威川に接近する箇所である。丘陵東側裾と安威川との間に、主要地方道茨木亀岡線が南北に走る。

ガス管埋設工事は、幅 0.4 ～ 0.6 m・深さ 0.7m・総延長約 30 mの範囲で行われた。立会調査では、工事区間東端の盛土（厚さ 35cm）直下で、灰黄褐色粘質シルト層を切り込む土坑状の遺構と、それに包含される縄文土器を確認した。遺構は幅 45cm・深さ 35cm 程度を測り、埋土は黒褐色粗砂混じり粘質シルトである。

遺構・遺物を確認したのはこの部分のみで、他の掘削箇所は掘削底（現地表面－ 0.7 m）まで、盛土ないし撹乱であった。

３．出土土器について（図３）

24 点出土した。いずれも破片で接合しないため、器形などは不明である。口縁部片１点、頸部片１点、外面に縄文が認められる体部片２点の計４点を図示した。

１は口縁部片である。口縁端部内面に刻み目が３箇所認められ、外面に沈線が４条施される。小片のため定かではないが、沈線がやや斜めになっているようにも思われ、波状口縁になる可能性もある。後期中葉の北白川上層式と考える。

２は頸部片である。片側が外反する。内外面とも磨滅のため調整不明である。

３・４は体部片である。いずれも外面に単節斜縄文ＲＬが認められる。

他の破片は､縄文などの調整が認められないが、１～４と胎土及び色調に大きな差異が認められないため、これらも縄文土器としてよいと考える。

時期の判断は口縁部である１によっているが、北白川上層式期には土器に施される縄文は単節斜縄文ＬＲが主体となることが指摘されている（岡田 2008）。これによれば、北白川上層式以前となるが、今回は量が少ないことから、現状では上述した時期と捉えておく。

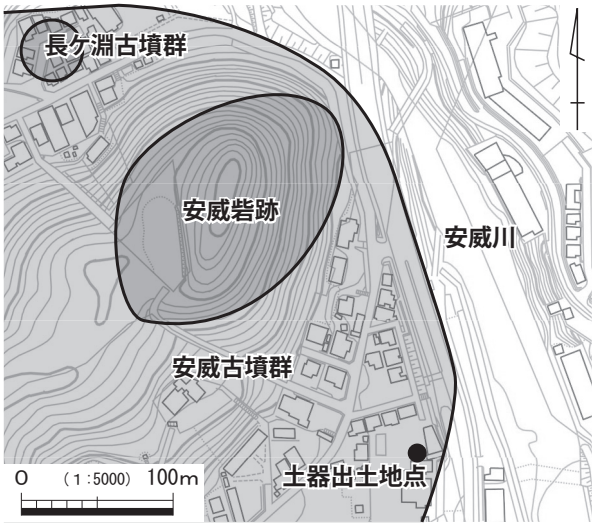

図１　出土地点位置図

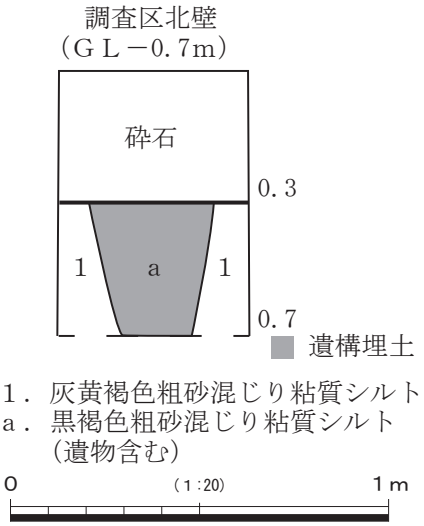

図２　土層断面柱状図

４．茨木市内域の様相（図４・表１　註３）

縄文時代は、紀元前約 14,000 年から紀元前約 1,000 年頃までのおよそ 13,000 年に及び、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の６期に区分されている（註４）。

茨木市域では、縄文時代の遺物が出土した地点が 28 箇所確認されている。また、遺構が確認された地点は９地点である。

以下で各時期の概要を記し、茨木市域における遺跡の動態を追う。

草創期　遺構・土器は確認されていないが、有茎尖頭器・両面加工の尖頭器といった石器が複数の地点で出土している。

石器の分布状態から、草創期の活動範囲は市域北側の北摂山地及び、西側の千里丘陵であったと考えられる。

早期　遺構は未確認だが、前葉の押型文土器が山間部の遺跡で確認されている（註５）。

また、異形部分磨製石器（トロトロ石器）が旧北辰（ほくしん）中学校校庭地点（茨木市 2014）と粟生間谷遺跡で出土している。この石器は高山寺式と共伴すると考えられている（田部 2003）。

また栗栖山南墳墓群では、早期から前期の石器が出土している（伊藤 2000）。

早期の遺物が確認されているのは、いずれも山間部である。当該期の活動範囲は草創期に引き続き、現在の山間部であったと考えられる。生駒山西麓域の縄文集落の分析で、集落の立地はこの時期に採集していたクリの植生との関連が考えられている（大野 1997・泉 1999）。

前期　遺構は確認されていないが、土器が出土している。ただし、前期初頭から後葉までは未確認である。先述した生駒山西麓域では、縄文時代前期の集落は水際に進出していることが指摘され、漁撈との関連が考えられている（大野 1997）。生駒山西麓は河内湾を挟んだ対岸であり、同様の様相である可能性が高いと考えられる。

その点で、東奈良遺跡で出土している大歳山式（後葉）の土器（森田 1989）は周辺に集落が存在する可能性を窺わせる。

他に後葉の北白川下層式（註６）が千提寺南遺跡（公益財団法人大阪府文化財センター 2014 以下、大文セ）で出土している。

中期　粟生間谷遺跡（船元Ⅱ式・前葉、大文セ 2003）と千提寺南遺跡（北白川Ｃ式・末）で遺構が確認されている。分布は丘陵部と山間部に限られる。

北白川Ｃ式は、山間部と丘陵部の多くの遺跡で出土している。

後期　粟生間谷遺跡・西福井遺跡などで北白川

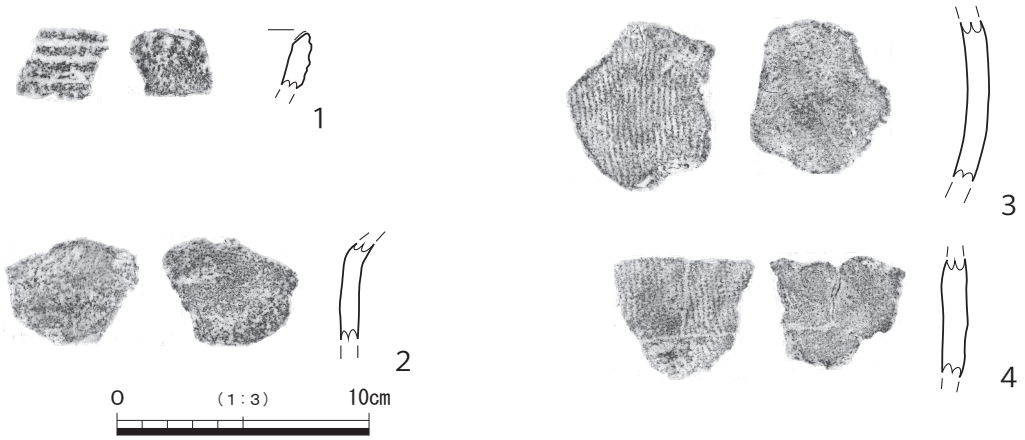

図３　出土土器実測図

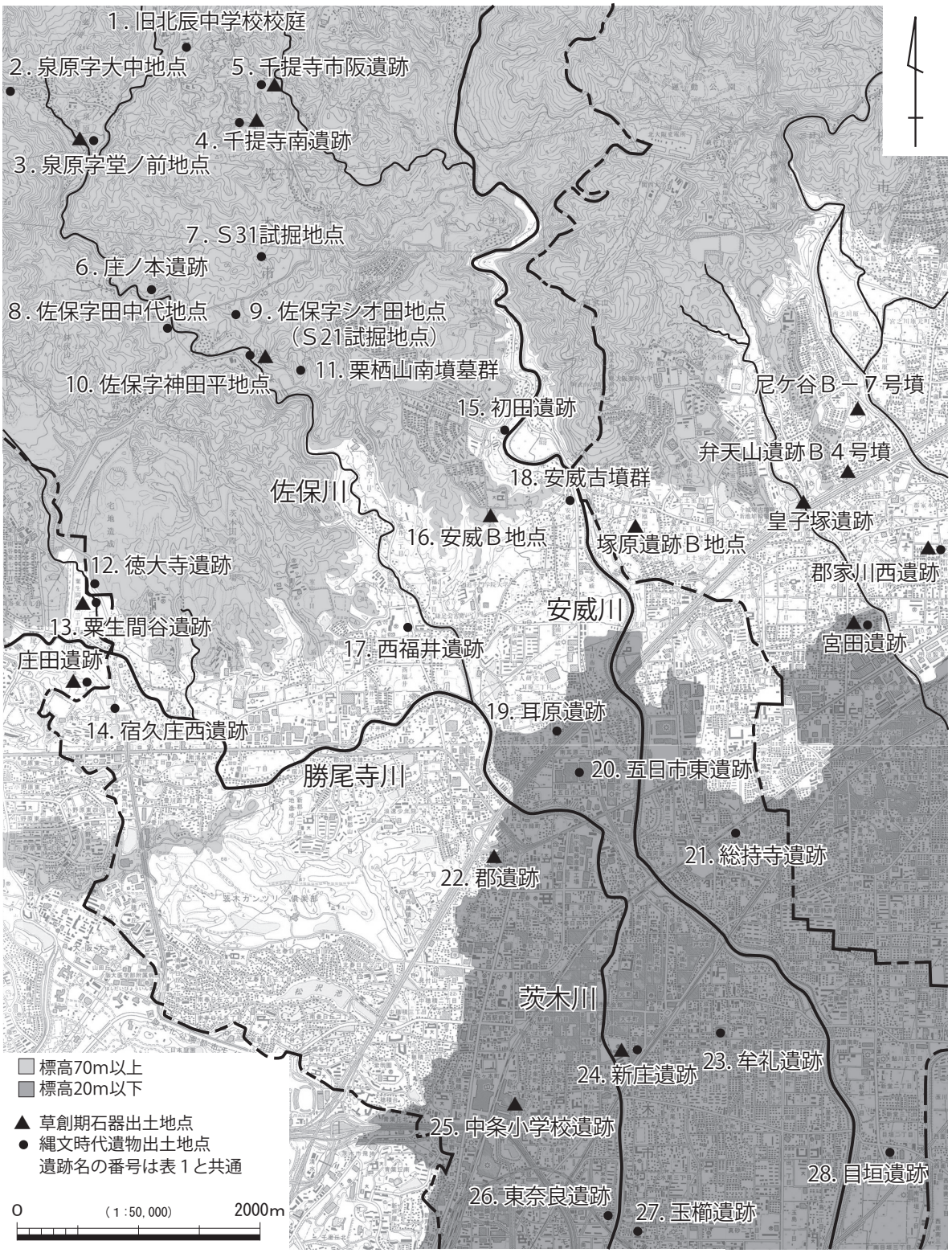

図4　縄文時代遺跡分布図

上層式を中心として遺構が確認されている。遺物は中期末から引き続き、複数の地点で確認されている。

晩期　市域中部以南にも生活の場が広がり、特に中葉の篠原式期（註7）以降は、遺構の確認されている地点は平野部が中心となる。これは水田稲作の開始と関係があると思われる。

耳原遺跡（註8）で土器棺（茨木市 2014）、五日市東遺跡の大型落ち込み・堅果類を詰めた深鉢が出土した土坑（長原式、茨木市 2014・市教委 2000）、徳大寺遺跡の竪穴住居跡（大文セ 1999）などが検出されている。なお、牟礼遺跡の井堰（茨木市 2014）は、滋賀里Ⅳ式～弥生土器（前期）と時期幅のある土器が出土しており、所属時期

表１　縄文土器編年表（１）

	番号	遺跡・地点名	草創期		早期						前期			中期		後期	
					前葉					早期末～前期初頭	後葉		型式不明	前葉	末	前葉	前葉
			有茎尖頭器	両面加工の尖頭器	神宮寺式	黄島式ないし穂谷式	高山寺式	異形部分磨製石器	穂谷式		北白川下層式	大歳山式		船元Ⅱ式	北白川Ｃ式		中津式
山間部	1	北辰中学校校庭地点						●									
	2	泉原字大中地点				●	●								●		
	3	泉原字堂ノ前地点		●	●	●			●				●		●		
	4	千提寺南遺跡	●							●	●				●	●	
	5	千提寺市阪遺跡	●		●				●						●		
	6	庄ノ本遺跡															
	7	Ｓ 31 試掘地点													●		
	8	佐保字田中代地点					●		●						●	●	●
	9	佐保字シオ田地点（Ｓ 21 試掘地点）															
	10	佐保字神田平地点		●													
	11	栗栖山南墳墓群													●		
丘陵部	12	徳大寺遺跡															
	13	粟生間谷遺跡	●					●						●			●
	14	宿久庄西遺跡（庄田遺跡含む）	●														
	15	初田遺跡														●	
	16	安威Ｂ地点	●														
	17	西福井遺跡								●					●		
	18	安威古墳群															
	19	耳原遺跡													●		
平野部	20	五日市東遺跡															
	21	総持寺遺跡															
	22	郡遺跡		●													
	23	牟礼遺跡															
	24	新庄遺跡	●														
	25	中条小学校遺跡	●														
	26	東奈良遺跡										●					
	27	玉櫛遺跡															
	28	目垣遺跡															

表１　縄文土器編年表（２）

	番号	遺跡・地点名	後期 中葉 北白川上層式	後期 中葉 一乗寺K式	後期 中葉 元住吉山Ⅰ式	後期 後葉 宮滝式	後期 後葉 後期後半～晩期初頭	晩期 前葉 滋賀里Ⅱ式	晩期 中葉 滋賀里Ⅲａ式	晩期 中葉 篠原式	晩期 後葉 滋賀里Ⅳ式	晩期 後葉 口酒井期	晩期 後葉 船橋式～長原式	時期不明 石器
山間部	1	北辰中学校校庭地点												
	2	泉原字大中地点												
	3	泉原字堂ノ前地点				●								
	4	千提寺南遺跡											●	
	5	千提寺市阪遺跡												
	6	庄ノ本遺跡												●
	7	Ｓ31試掘地点			●		●				●		●	
	8	佐保字田中代地点	●	●										
	9	佐保字シオ田地点（Ｓ21試掘地点）												●
	10	佐保字神田平地点												●
	11	栗栖山南墳墓群												●
丘陵部	12	徳大寺遺跡											●	
	13	栗生間谷遺跡	●	●		●		●	●				●	
	14	宿久庄西遺跡（庄田遺跡含む）												●
	15	初田遺跡												
	16	安威Ｂ地点												
	17	西福井遺跡								●			●	
	18	安威古墳群	●											
	19	耳原遺跡								●			●	
平野部	20	五日市東遺跡								●			●	
	21	総持寺遺跡							●	●	●	●		
	22	郡遺跡											●	
	23	牟礼遺跡									●		●	
	24	新庄遺跡											●	
	25	中条小学校遺跡												
	26	東奈良遺跡											●	
	27	玉櫛遺跡											●	
	28	目垣遺跡											●	

には検討を要するとされる（森田 1989・茨木市 2014）。

一方、山間部から丘陵部にかけては稀薄で、Ｓ31試掘地点・千提寺南遺跡・栗生間谷遺跡で遺物が出土しているにとどまる。

また、石刀・石冠・独鈷石・男根状土製品などの祭祀関係遺物の出土が認められる。

５．まとめ

これまで述べてきたように、茨木市域では、量の多少や未確認時期もあるが、草創期から晩期までの遺構・遺物が確認されている。これまで茨木市域の縄文時代は、耳原遺跡の晩期の土器棺のみが目立った存在であった。しかし草創期からの遺物が確認されていることで、多様な活動が営まれていたことがわかってきた。縄文時代の気候変動

と集落動態を合わせて考えることで豊かな歴史像を描くことができるだろう。また、今後意識をしていくことで前期の遺構・遺物が平野部で確認される可能性がある。

註

１）当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「安威古墳群」の範囲内に位置する。

２）免山篤氏の採集資料は、茨木市立文化財資料館に寄贈され、整理作業を進めている（茨木市立文化財資料館 2014）。

３）図４は本来地質条件図などを基にして色分けを行うべきであるが、今回は便宜的に標高 70m 以上（山間部）と 20 m以下（平野部）で色分けを行っている。本文中では 20 ～ 70 mの間を「丘陵部」としている。また、表１は遺物が確認された型式名のみを記載している。

茨木市 2014 では、「佐保字シオ田」の項で土器・石器が掲載されている。しかし、石器は佐保字シオ田地点のものだが、土器は別地点のＳ 31 試掘地点の出土遺物である。また、滋賀里Ⅳ式以降が突帯文土器である。滋賀里Ⅳ式、篠原式・船橋式、長原式の３時期に区分されているが（岡田 2011）、既往の文献において船橋式と長原式が分別されていないものもある。また、残存状況の悪い深鉢の口縁部だけでは判断の難しいこともあり、表ではまとめている。

４）縄文時代の開始は、土器の出現を画期とするか（草創期から）、狩猟・採集・漁撈といった縄文時代の主な生業活動の確立を画期とするか（早期から）によって見解が分かれている（井口 2012・勅使河原 2013）。また、縄文時代から弥生時代への移行についても水田遺構に伴う晩期の土器（九州の夜臼式土器）の例があり、この時期を弥生時代早期とする見解もある。

５）千提寺市阪遺跡において、落込・溝・土坑などが検出されている。早期と中期末の土器が出土しているが、報告書ではいずれの時期か限定されていない。サヌカイトのチップが出土していることから、石器の加工を行っていたキャンプサイト的な性格が考えられている。

６）北白川下層式をはじめ、型式が細分されているものもあるが、今回は各型式の遺物量が少ないため、一括している。

７）従来、滋賀里Ⅲｂ式と呼称されていたものだが、（家根 1994）で篠原式に改称された。

８）耳原遺跡の土器棺墓群は、篠原式期と長原式期に営まれているが、滋賀里Ⅳ式期と口酒井期は認められず連続して営まれたものではない。

参考文献（五十音順）

井口直司 2012『縄文土器ガイドブックー縄文土器の世界ー』新泉社

泉拓良 1999「大阪の遺跡からみた縄文時代」『大阪を掘る～遺跡でたどる大阪の歴史～』財団法人大阪都市協会　pp. 25-49

伊藤栄二 2000「第７章　第 12 節　栗栖山南墳墓群出土石器の検討」『栗栖山南墳墓群』財団法人　大阪府文化財調査研究センター　pp. 326-333

茨木市 2014『新修　茨木市史』第７巻　資料編　考古

茨木市教育委員会 1982『耳原遺跡発掘調査概報』

茨木市教育委員会 1993『倍賀遺跡発掘調査概要報告書』

茨木市教育委員会 1999「Ⅱ目垣遺跡発掘調査の概略」『平成９・10 年度発掘調査事業報告』 pp. 6-19

茨木市教育委員会 2000「五日市東遺跡」『平成 11 年度発掘調査概報』 pp. 34-38

茨木市教育委員会 2002「牟礼遺跡」『平成 13 年度発掘調査概報』 pp. 42-45

茨木市教育委員会 2015『中条小学校遺跡発掘調査報告書』

茨木市立文化財資料館 2014『茨木に眠る資料ー免山篤コレクションを中心にー』

大阪府教育委員会 1996『新庄遺跡』

大阪府教育委員会 2017『西福井遺跡』

大阪府教育委員会 2018『西福井遺跡Ⅱ』

大野薫 1997「生駒山西麓域の縄文集落」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会編　和泉書院　pp. 15-44

岡田憲一 2008「近畿地方最後の縄の系譜ー縄文時代後期における縄文原体の転換背景ー」『文化財学としての考古学』泉拓良先生還暦記念事業会　pp. 159-172

岡田憲一 2010「Ⅲ特論　３．縄文原体」『西日本の縄文土器　後期』千葉豊 編 真陽社　pp. 234-239

岡田憲一 2011「第Ⅴ章２節　近畿地方縄文晩期土器編年と奈良県下基準資料」『重要文化財　橿原遺跡出土品の研究』奈良県立橿原考古学研究所　pp. 310-336

木村健明 2017「中条小学校遺跡（CJS12 －１）調査出土遺物（補遺）」『茨木市立文化財資料館　館報』第２号　茨木市立文化財資料館　pp. 22-23

財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998『玉櫛遺跡』
財団法人大阪府文化財調査研究センター 1999『徳大寺遺跡』
財団法人大阪府文化財調査研究センター 2000『栗栖山南墳墓群』
財団法人大阪府文化財センター　2002『宿久庄西遺跡』
財団法人大阪府文化財センター 2003『粟生間谷遺跡－旧石器・縄紋時代編－』
公益財団法人大阪府文化財センター 2014『千提寺南遺跡』
公益財団法人大阪府文化財センター 2015『千提寺西遺跡　日奈戸遺跡　千提寺市阪遺跡　千提寺クルス山遺跡』
新海正博・森先一貴 2003「国文地区内試掘出土資料および免山篤氏所蔵資料」『粟生間谷遺跡－旧石器・縄紋時代編－』財団法人　大阪府文化財センター　pp. 333-343
田部剛士 2003「粟生間谷遺跡出土の縄文石器の位置付け」『粟生間谷遺跡－旧石器・縄紋時代編－』財団法人大阪府文化財センター　pp. 175-182
辻本充彦 1977「三島地方採集の石器」『大阪文化誌』第３巻第４号　財団法人大阪文化財センター　pp. 1-23
勅使河原彰 2013『ビジュアル版　縄文時代ガイドブック』新泉社
東奈良遺跡調査会 1981『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅱ』
光石鳴巳 2003「大阪府北摂地域出土の有茎尖頭器について」『粟生間谷遺跡－旧石器・縄紋時代編－』財団法人大阪府文化財センター　pp. 311-320
名神高速遺跡調査会 1998『耳原遺跡・五日市遺跡発掘調査報告書』
免山篤 1999「考古資料よりみた清渓周辺」『彩都（国際文化公園都市）周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』財団法人　大阪府文化財調査研究センター　pp. 373-396
森田克行 1989「三島地方の縄文土器」『高槻市文化財年報昭和 61・62 年度』高槻市教育委員会　pp. 16-47
家根祥多 1994「篠原式の提唱－神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討－」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』北海道大学文学部　pp. 50-139